

# マルクス主義疎外論に関する一研究

——マルクス主義の創造的發展のために——

今 川 栄 司

## 序

マルクス主義の危機<sup>(1)</sup>が叫ばれてすでに久しい。そして、その創造的發展すべき思想の登場を望む声は、ますます増大しつつあるように思う。一時期圧倒的な支持を得て、現実の政治的力となっていたにもかかわらず、こういった状況の中で、マルクス主義の送葬なり再生が言い争われている<sup>(2)</sup>。しかし、大切なのは「創造的發展」である。未来はどこからか突然生まれるものではなく、現在の状況下から現在の人間が創造していくものである。ならば、現代におけるマルクス主義の危機は、次の時代の思想を生む腐蝕土となるはずである。それゆえ、現代のマルクス主義を發展する契機は、マルクス主義

の中に沈澱しているはずである。

本稿で試みるのは、マルクス主義の創造的發展のための一試論であり、さらに準備作業にすぎない。そのために、ここで取り扱うのは、「疎外」である。それは、疎外という概念がマルクス思想の重要な鍵になると考えるからである<sup>(3)</sup>。それは第一に、いわゆる初期マルクスの代表作である『経済学・哲学草稿』において展開される「疎外された労働」が、『資本論』へ至る彼の思想形成の基本的な出発点（問題意識）となると考えるからである。その基本的な出発点に立ち戻ることによって、彼の思想の根本的な方向性・本質が明らかにすると考える。第二に、しかし、私の問題意識は単なるマルクス自身の思想形成史を追うことではなく、その可能性を追求するものであるから、現代の社会状況に目を向けなければな

らない。そう考えた場合、現代における人間疎外の深化は、一四〇年も前に書かれた、「人間（労働者）」は、ただわずかに彼の動物的な諸機能、食うこと、飲むこと、産むこと、さらにせいせい、住むことや着ることなどにおいてのみ、自発的に行動していると感ずるにすぎず、そしてその人間的な諸機能においては、ただもう動物としてのみ自分を感じずる」といった断片と驚くほど適合する。このことは、マルクス主義の可能性を示唆するものであると考える。初期マルクスの疎外論を検討する中から、マルクス主義発展の契機が開かれると考える。さらに第三に、マルクスの疎外論を検討することによって、現代のさまざまな立場からの疎外論をも考察できると考えるからである。すなわち、マルクス主義の可能性を追求するには、マルクス主義のみを検討することにとどまらず、実存主義、構造主義等の現代思想の諸潮流の中でマルクス主義をとらえる必要がある。そういう意味で疎外論は、その格好の材料となる。日高六郎氏の言葉を借りるならば、「第二次世界大戦後における世界の主要な思想潮流が、すべて疎外の問題に関心をほらい、いわばこの問題を中心に、対立する諸思潮の対話の可能性さえ構想できるように思われるのである」<sup>(5)</sup>。

そういった意味での疎外論を展開しているとはいっても、疎外ないしは労働の疎外は、近代市民社会という特定の社会

における特定の条件のもとにおいて成立するものであるから、本稿は同時に近代市民社会における人間の問題を展開している。それゆえ、最初に近代市民社会の歴史性・内容を考察し、その中の人間の状況をみていく。そして、そこから疎外の意味を検討していきたい。

## 第一章 市民社会

マルクスは、「市民社会」を「直接に生産と交通とから出発する社会組織」<sup>(6)</sup>、あるいは「物質的な生活諸関係の総体」と規定している。この規定にしたがえば、市民社会は資本主義社会以前にも存在していたといえる。しかし、前資本主義社会においては、物質的な生活諸関係に、政治的な支配関係や身分的諸関係、すなわち、経済外強制が分かちがたく融合していた。契約に基づく等価交換を原則とする商品交換の発展が、経済外強制から物質的な生活諸関係を解放し、その自立的な発展を可能にする。以下において考察するのは、このようにして成立した近代市民社会である。

近代は、共同体の根本的な崩壊とともに始まる。閉じた小世界としての共同体の崩壊から「社会」が創出される。この歴史的過程についてマルクスは、次のように述べている。

「われわれが歴史を遠くさかのばればのぼるほど、個人は——したがって生産する個人もまた、ますます非自立的な、

ひとりのいっそう大きい全体に属するものとしてあらわれる。つまり、はじめには、まだまったく自然なあり方で家族に、および種族にまで拡大された家族に属するものとしてあらわれる。十八世紀になり、『ブルジョア社会』においてをはじめて、社会的な連関のさまざまな形態は、個人の私的な目的のための単なる手段として、外的必然として、個々人に対立するようになる。<sup>(8)</sup>

では、このようにして成立した近代市民社会は、それ以前の社会と較べてどのような特質をもっているのか。この問いに対する一つの解答として、マルクスは、諸個人がとり結ぶ社会的関連Ⅱ依存関係の質的差異を取りあげ、それによって人類史を三段階に区分している。

「それぞれの個体は、あるもののかたちで社会的な力を保持している。ものからその社会的な力をうばってみよ。そうすれば、諸君は、その社会的な力を諸人格のうえにたつ諸人格にあたえるにちがいない。人格的依存関係（はじめはまったく自然発生的）が第一の社会的諸形態であり、そこでは人間の生産性はごくかぎられた範囲で、孤立した地点でのみ発生する。物象的依存関係にもついた人格的非依存性が第二のおおきな形態であり、そこでは全般的な社会的物質代謝、普遍的な諸連関、全面的な社会的物質代謝、普遍的な諸連関、全面的な欲望、そして力能などの体系が

はじめてうちたてられる。諸個体の普遍的な発展にもつく、また諸個体のゲマインシャフト的、ゲゼルシャフト的な生産性を彼らの社会的力能としてしたがつわていくことにもつづいた自由な個性性は、第三の段階である。第二段階が、第三の段階の諸条件を生みだす。古代の状態（おなじく封建的な状態）とおなじように、家父長的な状態は、商業、奢侈、貨幣、交換価値の発展とともに崩壊し、近代社会がそれらとおなじ歩調で成長する。<sup>(9)</sup>

ここでマルクスが示そうとしているのは、前市民社会↓近代市民社会↓市民社会の止揚形態としての共同体、という壮大な人類史である。それが三段階があるのは、弁証法の論理体系からして当然の帰結であるが、留意しなければならないのは、近代市民社会がこのマルクスの歴史観の中核をなしていることである。マルクスが考察の対象としているのは、近代市民社会であり、その社会的関連である。市民社会とは、先述したようにマルクスによれば、生産と交通とから展開される社会的組織体であり、「歴史の真のかまど」としていつの時代にも存在していた。しかし交換や交換価値、貨幣の未発達な段階では、それもまた未発達なものとして存在していたのである。そのような段階では、諸個人の関係は、より人格的な規定性を受けたものとして現れる。商品交換の全面的な発達がこの人格的依存関係を打破し、諸個人の関係を非依

存・独立したものに作る。それは、私的所有にもとづく社会的分業の発展と商品交換の拡大につれて、古い社会的基盤Ⅱ共同体の崩壊の結果である。この段階では、諸個人は、交換価値Ⅱ貨幣によって全面的な相互依存関係に立たされているのであり、この物的な依存性が、彼らの社会的関連を形成する。この段階を経て、交換価値に媒介される社会関係を物質的前提条件として、普遍的に発達した諸個人が自由で自覚的な共同体を形成するのである。

ここで触れておきたいのは、マルクスが社会的関連の発展を諸個人の能力の発展と関連づけ、両者を相互依存の関係としてとらえていることである。それは、すなわち、人間の労働・実践活動は、個的に完結する形で循環するのではなく、他の諸個人との社会関係——協働関係の中で展開されるからである。そして、諸個人が、自己の活動を融合する協働関係が拡大し複雑化すればするほど、そこで生産される社会的富は、諸個人の力の単純総和を凌駕するようになり、それに伴って、それを内在化させる諸個人の能力もまた相互的に発展するのである。社会的諸関係の総体と諸個人の能力の相互的發展という規定を人類史の客観的規準とし、そのうちに位置づけられた近代市民社会の諸関係を把握することによって、マルクスのいう、前市民社会↓近代市民社会↓市民社会の止揚形態としての共同体の間の連続性と継続が明らかになるの

である。

## 第二章 近代市民社会

個人の労働・実践活動は、諸個人の協働連関によって融合され、諸個人の力の単純総和以上の結合力を生み出すために、最初諸個人が活動した本質的な能力以上の成果をもって諸個人のもとに還元される。ならば、近代市民社会における社会的諸関係・生産力・社会的富の拡大・発展は、それを内在化させることによって自己の本質的な能力を形成する諸個人の全面的な発展をも完成させることができるはずである。しかし、近代市民社会では、諸個人の依存関係、社会的関連が、交換価値・貨幣という物的姿態をとって諸個人と対立し、社会的富が、諸個人の全面的な発展に還元しないのである。マルクスは、このような近代市民社会を、人間内奥の普遍的対象化が総体的疎外として現れるものとして、次のように述べている。

「ところがじっさい、偏狭なブルジョワ的形態を一皮むけば、富とは、普遍的な交換によってつくりだされる、個人の欲望、能力、享楽、生産力等の普遍性でなくてはなんであるう？ 自然諸力——いわゆる自然の諸力でもあり、人間固有の本性の諸力でもある——にたいする人間の支配の完全な発展ではないのか？ 先行する歴史的発展は、発展の

この総体性、言いかえると既成の尺度ではまったく測れないような、あらゆる人間諸力そのものの発展、を自己目的とするが、『富とは』この先行する歴史的発展以外のどんな前提ももたない、人間の創造的素質の絶対的創出ではないのか？　そこでは彼は、ある規定性のうちで再生産されるのではなくて、彼の総体性を生産するのではないか？

なにか既成のものにとどまろうとするのではなく、むしろ生成の絶対的運動のうちにあるのではないか？　ブルジョワ経済——そしてそれに対応する生産の時代——においては、人間内奥のこの完全な創出は、それを完全に空にすることとして現れ、この普遍的対象化は総体的疎外として現れ、そしていっさいの定められた一面的な目的の廃棄は、自己目的をまったく外部的な目的のために犠牲にすることとして現れる。<sup>(4)</sup>

では、このような事態（『「総体的疎外」を生み出す近代市民社会は、いかなる社会的諸関係を有するのか。』

封建社会から近代市民社会への移行は、人格的依存の紐帯の打破と、諸個人の人格的独立性の獲得をもたらした。こうして、人格的依存関係から解放され、人格的に独立した自由民、独立小生産者が生まれる。しかし、これら直接生産者は、資本の本源の蓄積において徹底的に収奪される。「いわゆる本源の蓄積は、生産者と生産手段との歴史的分離過程にほか

ならない」。<sup>(5)</sup>　そこでは、「自己の労働によって得られた、いわば個々独立の労働個人と、その労働諸条件との癒合に基づく私有は、他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取に基づく資本主義的私有によって駆逐される」。<sup>(6)</sup>　こうして、独立小生産者は資本家と賃労働者へと階級分化していくのである。

ところが、それによって、賃労働者は自己の人格的独立性を否定され、資本家によって身分的に支配されたり、自由を奪われ、労働を強制されたりするのではない。あくまでも、賃労働者は、自己の自由意志に基づいて自分の労働力を売るのであり、資本家と賃労働者とは自由・平等な私的所有者として等価交換を行なうのである。両者は、あくまでも対等な立場で、それぞれの自由意志に基づいて、契約という法的関係または意志関係をとって結ぶのである。そして、両者の交換が交換価値と貨幣によって媒介されている以上、両者は相互依存関係を形成するのである。マルクスは、この相互依存関係について次のように述べている。

「互いに無関心な個人の相互的で全面的な依存性が、彼らの社会的連関を形成する。この社会的連関は交換価値において現われている。その交換価値において各個人にとって、彼固有の活動または彼の生産物が、はじめて各個人のための活動または生産物となる。——中略——活動の社会的性格は、生産物の社会的形態、生産への個人の参与と同

じく、ここでは個人に対立する疎遠なもの、物的なものとして現われる。すなわち、諸個人が相互にふるまう行為としてではなく、諸個人に依存することなく存在し、互いに無関心な諸個人の衝突から生じる諸関係のもとへの諸個人の従属化として現われる。孤立した各個人にとっては生活の条件となっている、活動と生産物の一般的な交換、すなわちその相互的な連関は、彼ら自身には疎遠で独立なものとして、一つの事物として現われる。交換価値において、人間の社会的関係は事物の社会的な関係（ふるまい）に転化し、人格的な能力は物的な能力に転化している。」<sup>(64)</sup>

前章で述べたように、近代市民社会の成立によって実現される社会的諸関係の拡大、発展は、諸個人の欲望・意識の多様化・全面化をもたらし、それが人間の本質諸力を発展させる。しかし、近代市民社会における、人間の創造的素質の創出、人間内奥の普遍的対象化は、資本という物的姿態をもつて労働者に対立する。ゆえにマルクスは、近代市民社会では、人間の本質諸力・素質の総体的対象化は、総体的疎外として現われると規定したのである。さらにそれによって、近代市民社会における諸個人は、その社会的存在を失い、個人生活と社会生活が分離・対立するのである。

### 第三章 疎外された労働

労働の疎外を明らかにするとともに、疎外論をはじめて社会科学として展開したのは、マルクスの『経済学・哲学草稿』である。<sup>(65)</sup>『経済学・哲学草稿』においてマルクスは、国民経済学が分析しない私有財産という事実、「国民経済上の現に存在する事実」<sup>(66)</sup>を分析し、概念的に把握しようとした。概念的把握とは、私的所有や資本を物的な実体として認識するのではなく、そのような実体を生み出している、物を媒介として結ばれる社会的諸関係の総体、全体的な相互連関を総体的に認識することである。

「したがってわれわれは、いまや私有財産、所有欲、労働と資本と土地所有との分離、（という三者）のあいだの本質的連関を、また交換と競争、人間の価値と価値低下、独占と競争などの本質的連関を、さらにこうした一切の疎外と貨幣制度との本質的連関を概念的に把握しなければならぬ。」<sup>(67)</sup>

マルクスは、私有財産という事実を生み出す内的関係と本質的連関を概念的に把握し、この事実の概念を、「疎外された労働」と表現したのである。マルクスは、四つの疎外形態をあげている。

(1)「労働者にたいして力をもつ疎遠な対象としての労働の生産物にたいする労働者の関係。この関係は同時に、彼に敵対的に対立する疎遠な世界としての感性的外界ないし自

然的諸対象にたいする関係である。」<sup>(94)</sup>

(2) 「労働の内部における生産行為にたいする労働の関係。

この関係は、労働者に属していない疎遠な活動としての彼自身の活動にたいする労働者の関係である。」<sup>(95)</sup>

(3) 「こうして疎外された労働は、人間の類的存在を、すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも、彼にとつて疎遠な本質とし、彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は、人間から彼自身の身体を、同様に彼の外にある自然を、また彼の精神的本質を、要するに彼の人間的な本質を疎外する。」<sup>(96)</sup>

(4) 「人間が彼の労働の生産物から、彼の生命活動から、彼の類的存在から、疎外されている、ということから生ずる直接の帰結の一つは、人間からの人間の疎外である。人間が自分自身と対立する場合、他の人間が彼と対立しているのである。」<sup>(97)</sup>

今や、この文章を理解するのは容易である。私は、第一章において、社会的関連の発展と諸個人の能力の発展との相互関連について確認し、第二章において、近代市民社会の諸個人の存在と個変生活と社会生活の分離・対立について述べた。資本主義的生産様式の基本形態である協業による結合労働は、同じ数の個別労働の単純総和以上の使用価値を生み出す。すなわち、労働者は他人との協働によって自己の個体的制限を

克服し、人間の類的・社会的能力を發展させるのである。こうして、「諸個人の全面的な発展」が可能となるのである。

しかし、近代市民社会においては、このような結合された社会的労働過程は、資本家を買った労働力という物と生産手段という物との間の、すなわち、資本家に属する物と物との間の一過程であり、その生産物は資本家のものとなる。「疎外された労働」という概念は、このような人間的労働の社会的性格、諸個人の社会関係が、彼らの外に独立し、彼らに敵対するという事態を表現しているのである。したがって、この概念は、資本主義社会の物質的な諸生活関係の総体を概念的に把握したときにはじめて成立するものであって、あらゆる時代に共通する「本来的な人間」を措定して、それが資本主義社会においてはどのような疎外を被っているかを指したのではない。だからこそマルクスは、「疎外された労働」に具体的な四つの規定を示しているのである。ゆえに『経済学・哲学草稿』における疎外された労働の四つの規定は、『資本論』における、「それゆえ、商品形態の神秘に充ちたものは、単純に次のことの中にあるのである、すなわち、商品形態は、人間にたいして彼ら自身の労働の社会的性格を労働生産物自身の対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として、反映するということ、したがってまた、総労働にたいする生産者の社会的関係をも、彼らの外に存する対象

の社会的關係として、反映するということである」<sup>(94)</sup>という規定と同一の關係を表現しているのである。マルクスの問題意識は、常に特殊資本主義社会の事実の概念的把握であり、『経済学・哲学草稿』における「疎外された労働」の規定は、マルクスの基本的立場に自然主義・人間主義を基礎にして、生産手段の私有を基礎とする資本主義社会における労働者の自己疎外状態を暴露し批判したものであるといえる。

## 結 び

本稿で明らかにしようとしたことを、マルクスは次のように述べてくれている。

「あらゆる自然的なものが生成してこねばならないのと同様に、人間もまた自分の生成行為、歴史をもっているが、しかしこの歴史は人間にとっては一つの意識された生成行為であり、またそれゆえに意識をとまなう生成行為として、自己を止揚してゆく生成行為なのである。歴史は人間の真の自然史である」<sup>(95)</sup>

すなわち、社会的諸關係の發展とともに、外的自然だけでなく、自然存在としての諸個人の普遍的な類的本質諸力も次第に發展してゆくのである。生産力と生産關係との矛盾から、社会形態の段階的な發展を説明する「マルクス主義」では、人類史の具体的な内容に人間の自然史としての歴史の過程で

展開されてきた内容を具体的に把握することができない。ここでは、歴史の進歩を、生産力という抽象的な概念でしか説明できず、生産力が人間の生活―意識―存在との連関性において把握されない。故に、経済的要素が独立させられ、経済決定論的傾向に陥るのである。そして、このような自然―人間―社会についてのマルクスの認識は、後期『資本論』にも貫徹しているのである。

「労働はまず第一に、人間と自然とのあいだの一過程である。すなわち、人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する過程である。人間は、自然素材そのものにしたいて、一つの自然力として相對する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用する形態において獲得するために、彼の身体のもっている自然力、すなわち腕や脚、頭や手を動かす。この運動により、彼の外にある自然に働きかけ、これを變化させるとともに、同時に彼は彼自身の自然を變化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている潜在能力を發現させ、その諸力の活動を、彼自身の統御に服させる。ここでは、労働の最初の動物的に本能的な諸形態は問題としない」<sup>(96)</sup>

人間は、物質的・精神的な実践・労働によって、社会的諸關係・社会的富を生産し、豊富化してきた。しかし、近代市民社会では諸個人の類的本質諸力・社会的諸關係は、資本や



国家という形をとって、諸個人の生活過程から分離し、疎外態として現われる。「疎外された労働」の四つの規定は、このような事態を表現しているのである。

序において述べたように、本稿はマルクス主義の創造的発展のための準備作業にすぎない。故にそれは、いわゆる「正しいマルクス主義」に還るといようなことを意味するのではなく、現代におけるマルクス主義の可能性を追求することになる。そこで私は、初期マルクス（『経済学・哲学草稿』）と後期マルクス（『資本論』）を論理的・内的な連関性においてとらえ、マルクス主義を一貫性・総体性において把握しようとした。それは、初期マルクスの思想の巨大な貯水池の中に、現在の教条主義的マルクス主義克服の契機が沈澱していると考えたからである。疎外論は、単に『資本論』の近代市民社会の分析に結がるだけでなく、人間と人間の解放の全理論体系の内に、全面的な結果を示すであらう。すなわち、それが自然主義・人間主義である。

「ここにおいて、貫徹された自然主義あるいは人間主義が、観念論と唯物論とも異っていること、また同時に、それがこれら両者を統一する真理であるということをわれわれは見いだす。同時にわれわれは、（このような）自然主義だけが世界史の行為を概念的に把握する能力をもつということとも見いだすのである。」

## 注

(1) 「危機」が具体的にどういった問題を提起しているかは、それ自体大きな問題である。望月清司・内田弘・山田鋭夫・森田桐郎・花崎皋平共著『マルクス著作と思想』（有斐閣新書、一九八二年刊）では、「いまマルクスを語ろうとすると、明暗両面の気持になる」として、「今日ほどマルクス離れがはつきりした時代はない」と現代の状況を正直に吐露した後で、三つの問題を提起している（I~IVページ、参照）。

(2) 「討論、マルクス・可生が葬送か」（『思想』一九八三年第三号、七〇五号所収）。

(2) 細谷昂・畑孝一・中川弘・湯田勝共著『マルクス経済学・哲学草稿』（有斐閣新書、一九八〇年刊）五七ページ参照。

(4) マルクス著『経済学・哲学草稿』（岩波文庫版、九二ページ）。

なお、この著作は、一八四三年に執筆されたと推定される。

(5) 日高六郎「現代における自己疎外」（『思想』一九六二年第八号、四六〇号所収）二ページ。

(6) マルクス・エンゲルス共著『ドイツ・イデオロギー』（岩波文庫版、四九ページ）。

(7) マルクス著『経済学批判』・序言、岩波文庫版、一三ページ。

(8) 同右、『経済学批判序説』、二八八ページ。

(9) マルクス著『経済学批判要綱』（高木幸二郎監訳、大月書店）第一分冊、七九ページ。

(10) (6)に同じ。

(11) マルクス著『資本主義の生産に先行する諸形態』、国民文庫版、三一ページ。

(12) マルクス著『資本論』、岩波文庫版、第三分冊、三四一ページ。

(13) 同右、四一四ページ。

(14) (9)に同じ、七八ページ。

(15) 「疎外」という概念を初めて学術的に用いたのはヘーゲルであ

